

科学史技術史通信

特定非営利活動法人（申請中）

科学史技術史研究所

田中・山崎・飯田・菊池・道家文庫

No.2

2010.1.20

東京都中野区野方1-29-1-B101



中世同職組合（ツunft）加盟表（Zuerich・Savoy Hotel 会議室）（部分）
チューリヒの町は各種同職組合の事務所が沢山ある。日本では同職組合はギルドと称されてきているが、本来ギルドはツunftの一種。



岩倉使節団のチューリヒでのホテルと 連邦工科大学

周知の通り、不平等条約改正と西欧視察を目的とした岩倉使節団は、1871年12月23日（明治4年11月12日）パシフィック・メール・ラインの定期船の木造蒸気船アメリカ号で、留学生や付き人を入れて総勢107人で横浜を出発し、1873年9月13日、632日の旅を終えて、同港に帰着した。この間、米国、英国、フランス、オランダ、スウェーデン、ドイツ、イタリア、オーストリア等欧羅巴各国を視察したが、西欧政治体制や民主主義の実態、その経済的基盤としての工業生産さらには宗教政策や文化、教育などをいかに分析したかは日本歴史学上の大きな関心事であることはいうまでもない。

この岩倉使節団の活動と、その後の明治政府に与えた影響については、総論的な評価だけでなく、局所的な影響についても見逃せない点が少ない。

たとえば、団員の一人の大島高任は、1872年12月17日から一月余り一行と離れて、当時ヨーロッパの鉱山冶金の中心的存在であったフライベルク鉱山アカデミーを、日本人としてはじめて視察した¹。彼は、1857年南部藩の大橋高炉で日本初の洋式高炉での出銑に成功したことで知られるが、洋学教育のための日新堂を1861年設立、さらに翌年坑師学校を起こした。1870年には、坑学寮創設を政府に建白しているが、これは翌年8月の工部省工学寮の発想につながっている²。

さて、岩倉使節団は、チューリヒを訪問したことで注目される。

1873年6月19日 チューリヒ着³

6月29日 ジュネーブ着

当時、チューリヒでは、フランス・エコール・ポリテクニクのドイツ的形態の流れを汲むETH（連邦工科大学）があったからであり、岩倉使節団は当然ながら、この学校を視察した（ただし、大学側の訪問記録簿 Praesidial und Schulratsprotokolle 1854-1958 には記録されていない）。

この学校は、工学系高等学校としてはヨーロッパではレベルが高く、しかも工学教育の新しい方向を提示していた。のちに、工部大学校の都検 Henry Dyer が、工部大学校の基本設計をするときに、このETHを一つのモデルとしたと工部大学校卒業生のインタビューに答えている。（『工部大学校史料』）



チューリヒ連邦工科大学 右方はチューリヒ大学

だが、明治政府は、工部大学校の教師に、この先進的なETHから招くことはなかったし、あるいは直接的に範としてここから学ぼうとはしなかった。むしろ、当時、ヨーロッパでもっとも工学系教育では遅れていたイギリスから教師を招いたのである。周知のことである。幸いに、たまたま、招かれたDyerの良きをえたのが幸いにして、工部大学校はイギリスの遅れた工学教育を再現することにはならなかった。薩長藩閥の英国との癒着のなせる業であるが、岩倉使節団は、チューリヒで何を見たのかが問われるであろうし、あるいは岩倉使節団の役割が、明治政府政策

¹ 松尾展成『日本＝ザクセン文化交流史研究』大学教育出版2005 本書はザクセンを訪問した日本人に関する調査の貴重な労作である。

² 南部藩の製鉄については、富士製鐵株式会社釜石製鐵所『近代鉄産業の成立一釜石製鐵所前史』1957

堀内正名（編）『近代産業の父 大島高任の生涯』岩手東海新聞社1960、日本科学史学会『体系第20巻』1970

³ 「一泊しただけで翌日の午後には元日本公使シーベルの迎えをうけて首都ベルンに向かう」と記述しているものもある（泉三郎『岩倉使節団という冒険』文藝春秋2004）が、ホテル側の説明には、このホテルを拠点、数泊して近辺諸処に出掛けたという。（2009年11月4日現地開取り・木本）なお、ジュネーブでの滞在状況については、持田鋼一郎「スイスにおける岩倉使節団」米欧回覧の会編『岩倉使節団の再発見』思文閣出版2003に説明されている。なお本書は2001年開催のシンポジウム記録である。

2頁以降の内容は以下の通りです。
所員配布の印刷物でお読み下さい。



Hotel Baur 宿泊の 岩倉使節団の名簿

「インターネットの歴史研究・資料
保存グループ」の紹介：
田中 克範

お知らせ：全国大学史展「日本の大学—
その設立と社会—
<参考>全国大学史資料協議会について

日本科学史学会・第22期科学史学校開催
—木本忠昭「戦後日本技術史をめぐって」—
高橋 智子 (日本科学史学会普及委員会委員長)

科学史技術史研究所
— NPO 設立総会開催される

雑感：今を考える 日野川静枝



<短信>工部大学校お雇い教師
John Milne とフライベルク (木本忠昭)

研究所蔵書から

フライベルクで日本人留学生が直接薫陶を受けた

レーデプアの著作『鉄冶金ハンドブック』

(*Handbuch der Eisenhuettenkunde* 3 Bde 1884)